

聴 解 5

平形 裕紀子

Listening Comprehension 5

HIRAKATA Yukiko

週1回（10コマ）

登録者数 15人前後

レベル 中級

1 シラバス作成に当たって

言葉を聞き取り理解する場合、語彙や文法の知識はもちろんのことであるが、文字で理解したそれらの知識と、実際の音声とを結びつける必要がある。この文字と音との結びつきができないことが聴解の困難さの一因となっていると考えられる。例えば、「4、5人」という言葉を文字で示されれば、中級程度の学習者であれば、理解するのにさほどの困難は伴わないが、「しごにん」と音のみで提示されると、中級の学習者でも全く理解できないというケースに度々行き当たる。また、無声化や拗音化、撥音化などの音変化が起きた場合や、言い間違いの訂正や hesitation noise など、話し言葉に特有のものを聞いた場合も、たとえそれが学習者に既知の語彙や文法であっても、理解は困難となる。また、学習者の母語との関係や、それまでの授業を担当した教師の発音の影響などから文字を目にしたときに学習者が想起する音声と、実際の音声とのギャップがある場合も考えられる。これらの聴解の際に特有の困難さをいかに軽減していくかは、聴解の授業に当たって注意すべき点の一つであろう。

このクラスのシラバスの作成に当たっては、上記のような点を考慮に入れ、これらの問題を学生自身が認識できるような指示を与え、またその対処法を考えてもらうような授業を目指した。

2 目 標

シラバス作成で述べた点を考慮に入れ、このクラスでは以下の点を目標として上げた。

- ・日本語の自然な発音スピードに慣れ、標準的な発音で行われる音の正確な聞き取りができるようになる。
- ・日本語の発話における音変化の知識をつけ、変化した音の聞き取りに慣れる。
- ・会話に特有な表現の知識を増やす。

- ・さまざまな時事問題や専門分野における基本的な語彙を増やす。

3 使用教材

授業で使用する教材としては、上記の学習目標を達成するために、ニュース番組と、テレビドラマ・アニメ・映画などの2種類を用意した。

ニュース番組を選択したのは、発音が明瞭で音変化の少ないアナウンサーによる発音を聞き取るとことで標準的な日本語のスピードや発音になれてもらうためであると同時に、学生の日本での生活で必要もしくは触れる機会の多い時事問題に関する語彙を増やすためである。そのため、ニュースの選択に当たっては、その時々で話題になっているもの（コンピュータウィルスの問題、感染症の流行、国際情勢など）や、日本の文化・社会・経済に関係のあるもの（日本人の意識調査、経済界の話題など）、生活する上で必要なもの（制度改革、災害報道など）を選択した。また、授業の最初にアンケートを行い、学生がどんなニュースを聞きたいかを調べて、その結果もニュース選択の基準の一つとした。

もう一つのテレビドラマ等は、会話に特有な表現や音変化、俗語などについての聞き取りを行うためである。俗語については、変化が激しく、短期間で使用されなくなる場合もあるが、日本で生活する以上、実生活の上で学生が耳にする機会も多く、これらについての語彙を増やすことも必要であろうと考えたからである。また、学生からこれらの言葉の意味や使い方を学習したいという要望も多かったことも理由の一つである。

具体的には、ニュース番組としては、NHKの夜7時のニュース、もしくは夜10時のニュースを取り上げた。また、もうひとつの教材としては、テレビドラマ『総理と呼ばないで』、アニメ『ちびまるこちゃん』、映画『千と千尋の神隠し』を選び、学生の興味や能力に応じてこのうちのひとつを選択した。

これらの教材を使用するに当たって、以下のものをプリント教材として作成した。

ニュース番組：語彙リスト、内容理解問題、ディクテーション問題

ドラマなど：語彙リスト、内容理解問題。必要に応じて、文化的背景を説明したもの

4 授業方法

クラスでは、ニュースの視聴とテレビドラマなどの視聴を1コマずつ交互に行った。クラス全体としての聴解能力には学期毎にややばらつきがあるため、やや聴解能力の低い場合には、まとまりのあるドラマやアニメを最後まで聞いてもらうために、ニュースの視聴時間を削る場合もあった。

教室がLL教室ではないことと、ビデオテープでの視聴が主であることから、授業は教師がテープをコントロールし、全員で聞き取る全体学習で行った。宿題や復習用には音声テープを用意し、学生が各自コピーできるようにした。

4-1 ニュースの視聴

ニュース番組の視聴では、まず、語彙リストを渡し、語彙の意味確認を行った。その際、語彙はカタカナ語を除いて、すべてひらがなのみで提示した。これは漢字を提示してしまうと、漢字の知識のある学生はそれに頼ってしまい、意味の確認だけを行って音に対する意識が低くなってしまう可能性があるからである。また、ひらがなだけを提示することで同音異義語に対する注意を喚起する狙いもある。更に、先に述べた「4、5年」などのように目で見ただけではなんら問題のない言葉でも、音として提示された場合、まったく意味の予測がつかない言葉などもあることから、事前にこれらの言葉を音として認識させる必要があるからである。意味確認は、言葉の意味、用法を教え、また、学生自身が漢字を考えるという方法で行った。

次に、テープを止めずに、全体を聞き取る作業を行った。ここでは、ニュースの主な内容を掴むことに留意させた。視聴後、何についてのニュースだったかを確認し、このレベルの学生では比較的聞き取りやすい数字の確認などを行った。

その後、一文ずつテープを止めて、正確な聞き取りと内容確認を行った。その際、内容確認問題のプリントを配り、各自、問題の答えを書き込む形で授業を進めた。ここでは、助詞や動詞の形など細かい部分まで正確な聞き取りができることを目標とした。更に、アナウンサーの発音であっても起こる音変化、特に無声化や拗音「じゅ、しゅ」が「じ、し」に近くなる発音（「手術」が「しゅじつ」になるなど）、に留意させた。またニュースによっては特にカタカナ語を取り上げ、その聞き取り、意味の類推、カタカナ表記の仕方などを学習するようにした。

全体の聞き取りを行った後、クイズ、もしくは宿題の形で、ディクテーション問題を行った。

4-2 ドラマなど

ドラマなどのクラスでは、はじめにそれらを理解する上で必要な一般的な文化背景や登場人物の紹介、その人間関係から誰が誰に話すときにはどんな文体が使われると考えられるかなど、全体的な導入を行った後、視聴に入った。

ここでは、音変化や会話表現、俗語などを特に取り上げ、場合によっては、音変化の練習を先に行ってから、視聴に入る場合もあった。

ニュースと異なり、あまり細かい聞き取りは要求せず、内容理解を中心に行ったが、会話表現や音変化については、聞き取った音を元の音に戻すなど正確な聞き取り作業を行う場合もあった。

ある程度まとまった部分を聞いた後、内容理解問題を宿題とした。

5 評 価

ニュースの視聴後のディクテーション問題（2～4回）とドラマなどの宿題（2回程度）、最終テストを基準として評価した。

授業に6割以上出席した学生のほとんどは最終テストで6割以上をとることができたが、

授業に全て出席したにもかかわらず、5割以下の結果しか出せなかった学生もまれにいた。また、学生によっては内容理解問題とディクテーション問題の成績に極端な差が出ている者もあり、学生の学習方法によるものなのか、授業方法・テスト形式の問題によるものなのか、考えなければならない。

6 反省点と今後の課題

まず、評価の点でもふれたが、授業に出席し、宿題も提出していたにもかかわらず、Dの判定が出てしまう学生や、ディクテーションと内容理解の結果に極端な差が出てしまう学生がいたということは、授業方法が彼らにはあわなかった可能性があり、検討していかなければならない点である。聴解のクラスを全体学習で進めていくのは、個々の学生の理解状況に教師の目が行き届かないという問題がどうしても起こりがちになり、授業の進め方を工夫する必要がある。

この点に関連して、学生の聴解能力をどのように測っていくか、という点も検討していかなければならない点であろう。最終テストにはディクテーション問題も含まれているが、ディクテーションで聴解能力がどの程度測れるのかは疑問の余地がある。更に、授業で学習した内容だけをテストに出し、それに好成績を挙げたことで聴解能力が上がったと判断することも早計であろう。このクラスの最終テストでは多くの場合、授業であつかったニュースと同じ話題で異なったニュースをオプションの問題として出し、2回の聞き取りでどのくらい内容が聞き取れたかを計ったが、やはり学生によって結果にばらつきがあった。全体的にはテストの成績とこのオプションの問題の成績には関連性があるように見受けられた。しかし、全体の成績がよくない学生でもこの問題でよい結果を出した場合や、逆に全体の成績はよかったのに、新しいニュースについては概略しか聞き取れない場合もあった。

更に、聴解における文字の取り扱いについても考えていかなければならないであろう。このクラスでは当初、ドラマなどの聴解ではディクテーションなどを行わない予定であったが、学生の教室での行動を見ていると、聞き取ったものを逐語的に全てノートに取るという学生がほとんどであった。結局途中から学生の労力を省き、ノート取りにかかる時間を短縮するためと、誤った書き取りをさけるために、ほぼディクテーションに近いものをプリントとして渡すことになった。【聴解能力】が、内容が理解できることを指すのか、内容を理解し、更にそれを書き取ることができることまでを指すのか、あるいは、その方法のどちらが学生の日本語能力の向上により効果があるのか、検討の必要であろう。ただ、少なくとも、多くの学生は聞き取った言葉を全て文字にして表さないと不安が残る、もしくは「聞き取れた」と感じられないという傾向は存在する。そのため、最終目標が文字に頼らず聞き取りができることであるとしても、中級程度では文字化する作業も必要であると思われる。